The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	樋口一葉『ゆく雲』論 : 「心かよは」ない文
Author(s)	金, 侖姫
Citation	語文. 2012, 98, p. 12-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69193
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

樋口一葉『ゆく雲』論

――「心かよは」ない文――

金　侖　姫

一　問題の所在

『ゆく雲』（『太陽』第一巻第五号、明28・5・5）は従来、（下）の「世にたのまれぬを男心といふ」という一行が作品のモチーフとして注目され、「移り変わる男心」の観点から読まれることが多かった。

例えば滝藤満義氏は、一葉の日記「塵之中」の一節、「忘られて、忘られはてて、我が恋は行雲のうはの空に消ゆへし」（明治26年7月20日条）[1]を引用し、「ゆく雲は、男心のはかなさを悟り澄した語であるばかりでなく、恋の消滅を恐れる語」だと指摘している。[2]題名が念頭にあっての指摘であろうが、養子・継子という桂次・お縫の設定を説明するには不十分であったと考えられる。

注意しておきたいのは、「移り変わる男心」という枠組みでの論議の背景に、結びの一文「ほころびが切れてはむづかし」の解釈が関わっていることである。菅聡子氏は『樋口一葉事典』[3]で「ゆく雲」の梗概を次のように記している。

彼（引用者注：桂次）は遠く離れてもお縫の幸福だけを願っていると涙ながらに語り、手紙を書き続けることを約して故郷に帰っていった。お縫は沈黙したままであったが、桂次の言葉に初めて涙し、届けられる手紙を心待ちに読んでいるようだった。しかし初めのうちは頻繁に届いた手紙も、月日がたつにつれて間遠になり、ついには時候の挨拶の葉書だけになった。表面上お縫の毎日は変わらなかったが、彼女の心のほころびは切れてしまった。

傍線部から窺えるように、あたかも桂次の手紙が途絶えたことにより、お縫の「心のほころび」が切れたかのような捉え方になっていることが分かる。なお菅氏は「岩木のやうなる」お縫の姿勢は諦念の一つの形であって、最後の一文をその抑圧された「身と心の分裂」したことだとし、お縫の行く先に「狂気」を読んでいる。[4]このような解釈に対して、峯村至津子氏も「一人にし

たがう道」に身をそわせてゆこうとした彼女が、自らを抑圧しきることに失敗し、「ほころび」を切らした瞬間であった[5]」と同様の見解を示している。高良留美子氏もまた「桂次の心変わりにお縫の心は「ほころびが切れて」しまった」とし、「この言葉はほころびたところがさらに切れるという意味で、たんなる「ほころびる」とはちがう決定的な破局、心の崩壊を示唆」していると述べ、「上杉家の安穏が終わったことを暗示[6]」するものとして作品の末尾を解釈している。

しかし果たしてこのような読みは、『ゆく雲』の読解において有効だろうか。単に「移り変わる男心」というテーマだとすれば、熱しやすく冷めやすい青年という設定だけで十分なので、敢えて養子だとか継子だとかといった設定でなくても良かったのではないか。また男の「がむしゃらなアプローチ[7]」の前で、女の主人公が「冷やか」な態度を徹しなくても良かったはずである。

即ち本作において重要なのは、主人公が男女とも束縛の多い人物として設定されていることであり、最後まで桂次の前で「岩木のやうなる」態度を貫いたお縫という人物の造形ではないだろうか。論者は本作品における桂次の恋情及び心変わりは、お縫を「決定的な破局」に導くほどのものではなかったと考える。それを示唆するのが、手紙が途絶えていく状況であり、その状況の中でも変わらぬお縫の日常の提示であったと思われる。

本論ではお縫の「ほころび」が「切れ」た時点を「上杉家の安穏」のために「身を無いものにして」生きることを決意した「夫れより」（中）と読み取れる可能性を提示し、それぞれの境遇のためすれ違った二人を描いた作品として『ゆく雲』を読むことで、作中様々に仕掛けられた設定の戦略について検討する。

二　「上杉家」の内情を覗く存在としての桂次

『ゆく雲』の冒頭における描写の焦点は、「遊学」のため上京した「我れ（＝桂次）」が「今をる」「みやこ」から「故郷」である「大藤村」へ帰らなければならないという状況の提示である。

酒折の宮、山梨の岡、鹽山、裂石、さし手の名も都人の耳に聞きなれぬは、小佛さゝ子の難處を越して猿橋のながれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなきに、勝沼の町とても東京にての場末ぞかし、甲府は流石に大厦高樓、躑躅が崎の城跡など見る處のありとは言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず、こと更の馬車腕車に一晝夜をゆられて、いざ惠林寺の櫻見にといふ人はあるまじ、故郷なればこそ年々の夏休みにも、人は箱根伊香保ともよふし立つる中を、我れのみ一人あし曳の山の甲斐に峯のしら雲あとを消すこと左りとは是非もなけれど、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これまでに覺えなき愁らさなり（上）

詳細に見ると山梨県下の地名（裂石）と旧跡（酒折の宮）、甲斐国の歌枕（山梨の岡、鹽山、さし手）が列挙された後、「小佛」「猿橋」「さゝ子」峠、「勝沼」「甲府」といった八王子から山梨までの道筋[8]が語られている。「故郷」までは「都人の耳に聞きなれ

ぬ」土地を次々と通って、また「馬車腕車に一晝夜をゆられて」行かなければならないほどかけ離れている。物語はそのような片田舎に「今歳この度」帰ることが決まった時点から始まっているのである。

このような始まり方は、出原隆俊氏が指摘するように、北村透谷の『宿魂鏡』（『国民之友』明26・1・13）の「借用」に違いない。[9] 氏は『ゆく雲』の冒頭が『宿魂鏡』の設定を逆転させたような対照的な論理で設定されていながら「非現実的空間へと展開を見せる」『宿魂鏡』とは違って「日常性の論理の枠内で《起結》を貫徹させた」『ゆく雲』の展開に注目する。『宿魂鏡』において主人公芳三は、立身出世の夢を抱いて地方から上京した青年であり、許嫁（阿梅）がいながらも、下宿先の令嬢弓子と恋仲となる。さらに弓子の母が継母と設定されており、このような人物設定も『ゆく雲』と類似している。[10] だが、出原氏の指摘のように『宿魂鏡』は、弓子の継母によって追い出された芳三が狂乱状態に陥っていき、芳三・弓子・阿梅の三者の死といった破滅的な展開に帰着するのに対し、『ゆく雲』の結末では桂次は帰郷し、お縫もお作も「相かはらず」（下）の状況として描かれており、「日常性の論理の枠内で《起結》を貫徹させ」ている。

このように『ゆく雲』は、大きな枠組みとして「遊学」青年の桂次に帰郷することが促され、実際に「みやこ」を離れていくまでの過程が描かれた作品であると言えよう。しかし本作品は「大都会に遊学中の青年が故郷に帰省することを素材にした小説」[11]、つまり「帰省小説」の図式には回収し得ない複雑さを内包したテクストであることを押さえておかなければならない。

例えば宮崎湖処子『帰省』（民友社、明23・6）では田舎から出てきた青年が上京後数年間の都会生活で矛盾を感じ、その対極にある「故郷」を「楽園」として認識するという図式が採用されている。[12] 田園憧憬を伴った故郷回帰への志向は当時の「帰省小説の典型」[13]と見做される要素であった。本作品が「帰省小説」の範疇に入らない一つの要素として、「遊学」青年、桂次に「故郷回帰」に対する願望や田園（田舎）に対する憧憬などが全く見られないという点が挙げられよう。

例えば冒頭に見られる「都人」に対比される「我れのみ一人」という表現もそのことを物語っていると考えられる。勝沼の町も「都人」にとっては「場末」に過ぎず、甲府の名所も「都人」が「馬車腕車に一晝夜をゆられて」まで行く気にはならないだろうという認識は、年一回の帰郷でさえ気乗りがしなかった今までの桂次の心情を物語るものであろう。その意識の背後として考えられるのは、まず「故郷」に対する桂次の否定的な心情である。例えば（中）には「故郷」に対して「それは隨分不便利にて不潔にて、東京より歸りたる夏分などは我まんのなりがたき事もあり」と語られている。この「東京より歸りたる夏分など」は、冒頭の「年々の夏休みに〜」と呼応する箇所であり、屈折した桂次の感情は作中一貫して描かれていると言えよう。

上京した「田舎者」が「東京」の様々な〈近代〉的なものに遭

遇し、それに対比される「田舎（地方）」を意識するという枠組みは、[14]この作品に限られないことは言うまでもない。当時の「東京」が「地方からのおびただしい上京者」を「吸収」しており、[15]それ故、二葉亭四迷『浮雲』（金港堂、明20・6～22・8）、宮崎湖処子『歸省』（民友社、明23・6）、国木田独歩『帰去來』（『新小説』明34・5）、小栗風葉『ぐうたら女』（『中央公論』明41・4）、夏目漱石『三四郎』（『東京朝日新聞』明41・9～12）『こころ』（『東京朝日新聞』大3・4～8）など、文学的表象として「上京青年」というモチーフは多く用いられていた。

このことを考える上で山本欣司氏の「上京青年として桂次」を捉えるアプローチは興味深い。[16]氏は「上京というモチーフ」が当時の作品において、様々な展開を生成する「格好の起爆剤」であったとし、『ゆく雲』を「上京青年と下宿の娘の恋」という読者の期待を「見事に裏切る」小説として位置づけている。それに異論はないが、問題にしたいのは氏の次のような結論である。

（略）「ゆく雲」は二層に引き裂かれた構造を持つ小説である。表層には桂次の演ずる物語があり、深層にはお縫の孤独がある。ところが、上京青年と下宿の娘の恋という類型に引きずられ、重要であるかの印象を受ける表層のドラマは、じつは、ほとんど意味のないものであった。

氏は『ゆく雲』での桂次の設定を、継子のお縫の「孤独を浮かび上がらせる」機能以外に「ほとんど意味のないもの」として捉えている。滝藤氏も「この設定が生きるのは、わずかに桂次の継子お縫への同情を自然にしている点だけ」であると同様に解釈している。[17]果たしてそうだろうか。

桂次を「養子」とする設定の背後を考えるのに当たって重要なのは、（下）の「一人一箇の野澤桂次ならず」という一行だと考えられる。

養父清左衛門、去歳より何處其處からだに申分ありて寐つ起きつとの由は聞きしが、常日頃すこやかの人なれば、さしての事はあるまじと醫者の指圖などを申やりて、此身は雲井の鳥の羽がひ自由なる書生の境界に今しばしは遊ばるゝ心なりしを、先きの日故郷よりの便りに曰く（上）

まず「遊学」青年桂次を田舎に呼び戻す仕掛けとして用いられたのが、「養父」が「樂隱居」を望んでいることを知らせる番頭からの手紙であったことに注目する必要があるだろう。

大旦那さまこと其後の容躰さしたる事は御座なく候へ共、次第に短氣のまさりて我意つよく（略）此中より頻に貴君樣を御手もとへお呼び寄せなさり度、一日も早く家督相續あそばさせ、樂隱居なされ度おのぞみのよし（略）今の分にて孃さまと御祝言、御家督引つぎ最はや早きお歳にはあるまじくと大賛成に候（略）諸事清潔にして御歸りなさるべく、金故に耻ぢをお掻きなされては金庫の番をいたす我等が申わけなく候（略）其地の御片つけすみ次第、一日もはやくと申納候。六藏といふ通ひ番頭の筆にて此樣の迎ひ状いやとは言ひがたし。（上）

この引用から、桂次の帰郷が避けられない現実として迫っていることが読み取れる。岡保生氏の脚注[18]によれば「通ひ番頭」とは、「自宅に居住して、毎日主家に通勤する番頭」であり、ここでは「金庫の番をいたす我等」とあることから、数人の番頭を置いて金庫を管理するほどの財産家であることが推察できよう。作中には「地主」「野澤桂次といふ見事立派の名前」、「大藤村」の「造酒屋の大身上」（上）という表現もあり、人から「お浦山しき御身分」（中）と言われても不自然でない設定になっている。

特に見過ごしてはならないのは、番頭の手紙を指す表現が、手紙の引用部分より前の「故郷からの便り」から、引用後は「迎ひ状」となっていることである。番頭の手紙の直接引用で桂次の置かれた境遇と養家側の考えが端的に表されており、桂次の帰郷がやむを得ない現実として効果的に描かれていると思われる。

なお、番頭の手紙に「孃さまと御祝言」とあったように、桂次には「お作」という許嫁が存在していた。注意しておきたいのは作中、「故郷のお作」（上）「大藤村にお作」（下）とあるように、桂次にとって「故郷」が常に許嫁のお作の存在を想起させる場所だったことである。そして重要なのは、「今歳この度」の帰郷がお作との婚姻を意味するものであったことであろう。

「今をる此許」は、「養家」の縁によって可能になった下宿先であった。作中桂次の上京は「十八の春」からと設定されており、「今」は「二十二」なので、上京してから五年目ということになる。（下）の帰郷後の桂次の描写として「今日の我が身に爲す業しげゝれば」とあることを想起すれば、「造酒家」の養子の桂次に五年も自由な時間が許されたのは、彼の「養父」の好意なしでは難しかったに違いない。本人は「自由なる書生の境界」（上）と感じており、周りの目からは「お樂の御身分」（中）とも見え、さらに家督相続を促す「通ひ番頭」からの手紙には「いさゝかの學問など何うでも宜い事」（上）とさえあるので、桂次の「遊学」に特別な目的があったとは想像しがたいからである。

即ち桂次にとって東京での「遊学」は、「大藤村の人」（下）になる前に許された猶予期間であったと考えられる。だからこそ「家」の人にとっては、「赤尾の彦が息子のやうに氣ちがひに成つて歸つたも見て居り候へば」「放蕩ものにでもお成りなされては取返しがつき申さず」（上）という危険性を感じさせる「自由」な時間でもあった。その時間の終焉が前述したように帰郷を促す「迎ひ状」（上）によって告げられており、桂次自身が「いやとは言ひがた」い「養子」として設定されている点は、見過ごしてはならない。

さらにもう一つ注目したいのは、「下宿屋あるき」「下宿屋住居を半分と見つもりて」（上）「桂次此處に大方は宿を定めて」（中）とあるように桂次が下宿を一箇所に決めていないという点である。

これは、例えば二葉亭四迷の『浮雲』で父の死をきっかけに上京した内海文三が、叔父に当たる園田家の「秩序のなかに包みこまれていた忠実な同居者[19]」として八年以上も下宿していることとは対照的である。その原因が語られるのが（上）の次の段落であ

る。

伯父の勝義が性質の氣むづかしい處から、無敵にわけのわからぬ強情の加減、唯々女房にばかり手やはらかなる可笑しさも呑込めば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて誰れにつきても根からさっぱり親切氣のなき、我欲の目當てが明らかに見えねば笑ひかけた口もとまで結んで見せる現金の様子まで、度々の經驗に大方は會得のつきて（略）表むきは何處までも田舎書生の厄介者が舞ひこみて御世話に相成るといふこしらへでなくては第一に伯母御前が御機嫌むづかし（上）

この引用から、桂次が「上杉家」の「忠実な同居者」になれなかった主な原因が伯母（＝お縫の継母）にあったことが分かる。桂次の眼差しによって映し出される伯母という人物は、派手な振る舞い・見栄っ張りとともにその傲慢さが強調されており、厭わしい人物の典型として描かれていることが分かる。

重要なのは「性質の氣むづかしい」伯父までも牛耳る伯母という「上杉家」の状況が、「表むき」には分からないことである。（中）には「これを世間の目に何と見るらん、母御は世辭上手にて人を外らさぬ甘さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがりて、評判わるからぬやら」とあり、桂次自身も「度々の經驗」を積むうちに知るようになったと語られている。この設定の根底にある一葉の創作意図は、『ゆく雲』の未定稿AのⅡの（上）を参照すれば、試作段階から同様であったことが確認できる。

よそめには思ふ事なげなる娘様の胸にもそれ相應のうきはたゝへて、人しらぬだけがいとゝ苦るしかるべし、自身いはねば人しるまじ、小石川の富坂わきに、前は溝川にて杉のいけ垣、廣々と庭を取つて家は小ぢんまりとせし柳田をり江といふ禿頭の官員様あり、奥様利口に金の利を廻して旦那どのが月給に合しては有福なる暮し、母にはまゝのなれどもお縫といふ子もありて、一家の中いさゝかの苦情なく、まとかなる世に望月のかくる事なけれども、入立ちて見給へ世の何處にも波風はたつものなり

「小石川の富坂わき」「柳田をり江」「官員様」という設定は定稿には反映されていないが、それ以外はほぼ同様である。このように「いさゝかの苦情」もないと思われる家だとしても、表には見えない「波風」があるのだという語り方は、定稿は抑えられた表現になっているが、『ゆく雲』を読む上で参照してもよいだろう。

そして何より、表からは分からない「波風」を直接「入立ちて見」る役割が、他ならぬ桂次に与えられたことに注目しなければならない。人の家の内部に入り込むためには「伯母・伯父」に当たる親戚関係は不可欠な条件であったと考えられる。

例えば一葉の『暁月夜』（『都の花』明26・2）では、香山家の令嬢一重の噂を聞きつけた文学書生森野敏が、庭男になりすまし香山家に入り込むという設定が採用されている。そのことで外からは分からなかった香山家の様子が見えてくるという展開となるが、庭男という設定のため、敏はその様子を遠くから見て想像を

膨らませるしかない。その結果語り手は、一重の噂の真偽を一重自身の言葉を通じて明らかにするしかなかったのである。

それに対して『ゆく雲』では、桂次を「養子」と設定することで、外からは見えない「上杉家」の様子を直接語ることが可能になったと考えられる。桂次の「遊学」は「十八の春」から「二十二」までと、長期間に亘るものとして設定されており、「度々の經驗」を積んだ桂次の視点を用いることでより説得力を持つようになったと思われる。

このように桂次にとって五年間も許された「自由」（上）な時間は「養家の縁」によって、「上杉家」という一家に出入りすることを可能にさせ、表からは分からない一家の内情を知るのに十分な時間として作用していると言えよう。特に高慢な伯母の振る舞いに対比される「事なく仕へんとする」お縫の「温順」さは、桂次に「おぬひの事といへば我が事のように」と「同情」以上の感情を抱かせることになったと思われる。桂次は「母御は世辭上手にて人を外らさぬ甘さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがりて、評判わるからぬやら」（中）という世間の評判の背後に、「萬ひかへ目にと氣をつく」るお縫の犠牲を知るようになったのである。

しかし桂次はあくまでも「腑甲斐ない」「養子」であった。この設定の背景として明治26年4月『家庭雑誌』第8号に掲載された国木田独歩の「養子」という論説を参照しておきたい。

封建社会に重んぜらるゝものは家なり、人に非ず、人は寧ろ家の附属物の如し、家庭のあらゆる物悉く家の為に捧げらる、妻も家の為に娶り、又た家の為と称して追ひ出す、……養子制度は即ち『家』主義の絶頂なり、即ち家名相続は養子制度第一の目的なり、弊害の根本は己に茲に存るなり。……養子制度は其の根本に於て当底個人の幸福利益と一致せざるなり。[20]

この引用から、養子制度を「『家』主義の絶頂」と見なし伝統的な「家」制度を否定していた独歩の見解が見受けられる。またこれより先に独歩は『国民新聞』（明25・5・22）紙上で「親族」と題する論説を発表しており、ここで独歩は「養子制度に伴ふて尤も起り易きは親族の干渉なり」「養子に付て親族の干渉するは親切心にあらずして、多くは利己の為めなり」と「親族」の問題まで提起している。[21] このような当時の状況は、桂次が置かれた境遇を考える上で有効だろう。

例えば、冒頭に引用された「故郷よりの便り」（上）の「これ然るべき事と御親類一同の御決義」という表現が挙げられよう。桂次の「家督相続」を巡って「養父」だけではなく「親類」まで関わっているのである。これは、「よしや家督をうけつぎてからが親類縁者の干渉きびしければ、我が思ふ事に一錢の融通も叶ふまじく、いはゞ寶の藏の番人にて終るべき身」（上）と桂次自身も認識していたことである。そのような桂次の境遇を端的に示すのが、前述したように、末尾の「一人一箇の野澤桂次ならず」（下）であろう。そのため桂次は、お縫の置かれた苦境と「気苦

労」を目の前にしながらも、お縫のもとを離れていくしかないのである。その「愁らさ」が作品の冒頭から示されていると言えよう。

三「家」の「安穏」を守る存在としてのお縫

桂次が養子縁組を通して制度的に「野澤家」を継ぐ存在とするならば、お縫は「上杉家」の「安穏」を守る存在と見ていい。

例えば「当時流通していた〈縫うこと〉が喚起するイメージ」に着目した峯村氏の論考は、お縫の人物造形を考えるに当たって重要な示唆を与えるものと考えられる。峯村氏は、明治二十年代において〈縫物〉というイメージが「家のことに心を尽くすという、当時理想とされた女性のあり方を象徴」するものであったと記し[22]、当時の女性にとって「截ち縫い」の業が「極めて強調されて」いたことを、明治期における「女大学」の流布状況を取り上げることで明らかにした。「女大学」という語の用例は『日本国語大辞典』第二版[23]では、二葉亭四迷『浮雲』と夏目漱石『虞美人草』(『東京朝日新聞』明40・6・23～10・29)が挙げられている[24]。当時の女性の教育を巡る言説の中に「女大学」という語が多く用いられていたことからも、峯村氏の見解は肯定される。

峯村氏はさらに、お縫が「針仕事」に熟達していく「分岐点」が「十歳」であることに注目し「女大学」の教えと関連させている。『女大学集』の「十歳より外にいださず、閨門の内にのみ居て、織り・縫い、紡み・績ぐわざをならわしむべし」[25]をその根拠として提示したのである。しかし、このような峯村氏の見解にはお縫の実母の死が今から「十年ばかり前」(上)と設定されていることへの視点が欠如しているのではないだろうか。

> 十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥様には繼なる娘あり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人髷に赤き切れかけて姿はおさなびたれども母のちがふ子は何處やらをとなしく見ゆるものと氣の毒に思ひしは、我れも他人の手にて育ちし同情を持てばなり、何事も母親に氣をかね、父にまで遠慮がちなれば自づから詞かずも多からず、一目に見わたした處では柔和しい温順の娘といふばかり(上)

桂次がお縫を初めて見たのは、お縫が「十四か三か」の時であって、その時すでに継母である「奥様」がいたのであり、実母は亡くなっている設定になっていることが分かる。当時のお縫が「何處やらをとなしく」「詞かずも多からず」「柔和しい温順の娘」に見えたという桂次の回想は、主観的なものとは捉えにくい。「十歳ばかりの頃まで」活発だったお縫の性格を考えれば、そこにいくら「女大学」の教えの影響があったとしても、わずか数年でこのように変化したのは異常ではないだろうか。作中には「もの言へば睨まれ、笑へば怒られ、氣を利かせれば小ざかしと云ひ、ひかえ目にあれば鈍な子と叱られる」(中)とも語られており、お縫の変貌の背後に、継母育ちといった厳しい状況が介在していた可能性は十分考えられる。

つまり、お縫が自由奔放に過ごしていたのは、実母が生きていた頃までであって、「自づから詞かずも多からず、一目に見わたした處では柔和しい温順の娘」（上）と見える原因は、継母の存在であると言えよう。そしてもう一つの原因として父の「冷たさ」が挙げられる。

実父であるにも関わらず、父は「ぬる湯一杯たまはらん情もなき」と描かれており、このような父の冷やかな態度は、お縫の性格形成に大きく作用していたと考えられる。実母が亡くなったこともお縫にとって精神的な衝撃を与えたはずだが、継母の辛い仕打ちの中での父の冷たい態度は耐えがたい事態であったに違いない。作中お縫は、「一筋に母様の御機嫌、父が氣に入るやう」（中）「相かはらず父様の御機嫌、母の氣をはかりて」（下）と描かれており、「父にまで」「遠慮」（上）する姿が強調されている。

母が亡くなった後、継母と実父の狭間で生きることを余儀なくされているお縫の状況は、亡き母の墓前で「母さま母さま私を引取って下され」と泣く場面の描写からも推察できよう。しかしお縫は自ら命を絶つことができなかった。

つく〴〵思へば無情とても父様は眞實のなるに、我れはかなく成りて宜からぬ名を人の耳に傳へれば、殘れる耻は誰が上ならず、勿躰なき身の覺悟と心の中に詫言して（略）一生五十年めくらに成りて終らば事なからんと夫れよりは一筋に母様の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば家の内なみ風おこらずして、軒ばの松に鶴が來て巣をくひはせぬか（中）

お縫が懸念していたのは、自分が死んだ後の「人の耳」、つまり世間の評判であって、世間体が悪くなることによって父が味わうであろう「耻」のことであった。実父のことを思いやらずにはいられなかったお縫は「夫れより」、「一切この身を無いものにして」努める決心をしたのである。そしてその決心によって「上杉家」の平穏は維持されたのであった。

桂次が現れたのは、このようにすべてが収まった後である。実の父にも頼ることができず「まして他人の誰れにか慨つべき」（中）と諦め、死んだことと同様に生きていたお縫にとって、桂次の親切はどのようなものだっただろうか。

「お縫の内面は多く謎として止まっている」とする中丸宣明氏の指摘[26]のように、作中桂次に対するお縫の心境は、「岩木のやう」「木にて作られたるやう」（下）と喩えられているだけであり、詳細は語られていない。このような設定について滝藤氏は「未定稿から定稿への過程、あるいは敢えて言えば定稿内部において、恋い慕う女から岩木のような女へのねじれが生じた」（傍点ママ）[27]と述べている。氏の指摘のように、未定稿では「お縫が桂次への恋情をかなり積極的に口にする様子」[28]が散見する。

例えば定稿には、自分の帰郷のことに対してどう思うかと聞く桂次に、お縫が次のように答える場面がある。

どんなに家中が淋しく成りましよう、東京にお出あそばしてさへ、一ト月も下宿に出て入らつしやる頃は日曜が待どほ

で、朝の戸を明けるとやがて御足おとが聞えはせぬかと存じまする物を、お國へお歸りになつては容易に御出京もあそばすまじければ、又どれほどのお別れに成りまするやら、夫れでも鐵道が通ふやうに成りましたら度々御出あそばして下さりませうか、そうならば嬉しけれどゝ言ふ（中）

この場面は、試作段階と思われる未定稿Ⅴでは次のようになっている。

我身はこゝにかく近しきほど見參らせながらも、十日半月、よ所の下宿にでも出向ひて、御かほを見る時のなければ、何故か気のふさぎて物たらぬやうに覺ゆれども、さりとて用のなきに御手紙參らする事も出來ず、呼ましたきとても男女の中なれば人の思はく何となく耻かしく、心ぼそきやうにて我れ知らず涙がこぼれまするを、遠く〳〵三十里もはなれてふと御かほが見たく成しとて寫眞の外にうさを知らする事も叶はず、御前様御成業の曉をまつて、御歸國をいつと指折つて御出遊ばすおくら様のお心が思ひやられまするとて、おぬひ折ふしに故郷の妻を取出しては我が心を引いて見るらしき

傍線部から、未定稿ではお縫の心情がより具体的に示されていることが確認できる。特に桂次の「心を引いて見るらしき」という表現は、桂次の思いに「冷やか」な態度を一貫させている定稿とは違う展開であることが分かる。

お縫とてもまだ年わかなる身の桂次が親切はうれしからぬに非ず、親にすら捨てられたらんやうな我が如きものを、心にかけて可愛がりて下さるは辱けなき事と思へども、桂次が思ひやりに比べては遙かに落つきて冷やかなる物なり（中）

この引用から明らかであるように、お縫は桂次の親切を「辱けなき事」と嬉しく思ってはいるが、しかしそれが「桂次が思ひやりに比べて」「遥かに」違うものとして描かれていることが分かる。山本氏はこのことを本作品のわかりにくさの理由であると指摘し、「桂次の演ずる悲しい別離と彼の心変わり」と「お縫の抱える孤独と虚無感」という二つの話が「互いにほとんど交わることなく」物語を構成していると述べている。[29]

果たしてこのような解釈は妥当だろうか。論者は本作品の最初から「別離」が大枠として決められており、「身を無いものにして」生きているお縫の前に「腑甲斐ない」「養子」を登場させる設定こそが、語り手の戦略であったと考える。つまり本作の焦点は、二人のそれぞれの境遇ではなく、このような二人が「交わった」時生成される物語に当てられていたと思われる。そしてその結果として、最後まで桂次の恋愛感情に応じない「冷やか」なお縫という人物が造形されたと考える。

作中に描かれる、「あの高慢にあの温順なる身にて事なく仕へんとする氣苦勞」（上）、「一筋に母様の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば」（中）というお縫の行動は、「柔和しい温順の娘」（上）というお縫像を形成する土台として作用している。その結果、「上杉家」は「家の内なみ風おこらず」（中）平穏を保っているのである。つまり、「上杉家」に対

するお縫の態度が表向きには「温順」なものとして強調されていると言えよう。

一方、桂次に対するお縫の態度はひたすらその「冷やかさ」が強調されている。例えば、「桂次が思ひやりに比べては遙かに落つきて冷やかなる物なり」（中）「桂次が熱ははげしけれども、おぬひと言ふもの木にて作られたるやうの人なれば」（下）「岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども」（下）という描写である。作中では、桂次の熱い思いは「熱」「熱病」「狂気」という言葉によって描かれており、それに対するお縫の感情は、「木」「岩木」「正気」といった「落ちついて」「冷やか」なものと語られているところが散見する。

しかし、そのような態度をとることで「まづは上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし」（下）という結果が生み出されたのである。つまり作中お縫が見せる桂次への「冷やか」さは、桂次の「恋心」だけに向けられたものであり、お縫にとって「母様の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤」めることと、桂次の前で「冷やか」な態度を貫くことは結局同一なものであったと考えられる。

四　通わぬ心

作中お縫と桂次の対面場面は、二人の対話が描かれる（中）と、別れ際の桂次の「契りし詞」が語られる（下）の二か所である。ここに共通して描かれるのは、一方通行の桂次の思いであり、その思いに応じないお縫の姿である。

我れとても行きたくてゆく故郷でなければ、此處に居られる物なら歸るではなく、出て來られる都合ならば又今までのやうにお世話に成りに來まする、成るべくは鳥渡たち歸りに直ぐも出京したきものと輕くいへばそれでもあなたは一家の御主人さまに成りて采配をおとりなさらずは叶ふまじ、今までのやうなお樂の御身分ではいらつしやらぬ筈と押へられて、されば誠に大難に逢ひたる身と思しめせ。（中）

この引用から窺えるように、「軽く」言う桂次の言葉はお縫によって「押へられて」しまう。ここで桂次が「軽く」言っているのは、その言葉が単にお縫の意向を探っているだけであって慎重さに欠けているからであろう。しかしこのような桂次の態度に対してお縫は最後まで冷静な態度を崩さない。

例えば「氣のふさぐも道理とせめては貴嬢でもあはれんでくれ給へ、可愛さうなものでは無きか」という桂次の泣き言にも、お縫は「あなたは左様仰しやれど母などはお浦山しき御身分と申て居りまする」と継母の言葉を用いて対応している。そして「我れが幸福といふを考へれば、歸國するに先だちてお作が頓死するといふ様なことにならば」と言い放つ桂次の言葉に対しては「惘れて」おり、「貴君は其様の事正氣で仰しやりますか」と否定的な反応を見せている。即ちお縫にとって同情を引こうとする桂次の「心」は「解しかねる躰」であって、それ故「身をちゞめて引退く」しかなかったのである。

なお退くお縫を目の前にした時の桂次の姿は、「拍子ぬけのしていよ〳〵頭の重たくなりぬ」と描かれており、考えの違う二人の対話は、通じないままで終わってしまったことが分かる。このような二人が再び向き合うのが、（下）の次の場面である。

僅かなる人目の暇を求めてお縫が袂をひかえ、（略）我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゝざるべければ、君よりも十通に一度の返事を與へ給へ（略）男なきに涙のこぼれるに、ふり仰向てはんけちに顔を拭ふさま、心よわげなれど誰れもこんな物なるべし（略）此時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙ほろ〳〵こぼれて一ト言もなし。（下）

ここで注意すべきは、お縫が見せる「涙」の解釈である。「我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゝざる」と「男なきに」誓う桂次の言葉に、とうとうお縫は心を動かされてしまっただろうか。これに対し菅氏[30]は「岩木のように鎧ったお縫の心がついに動かされ」たと捉えており、関礼子氏[31]も「こぼれる涙は「岩木のやうなる」お縫もなにかに動かされたことを物語っている」と指摘している。両氏はこれを根拠とし、末尾の一文の「ほろこびが切れ」る直接の契機を桂次の裏切りに求めていると思われる。

しかし重要なのは、引用の点線部ではないだろうか。即ち、「此時こんな場合」普通なら「一生消えぬかなし」さを感じるかもしれないが、「何と思ひしかは知らねども」と、お縫の思いが隠蔽されていることである。そして「涙」だけ見せており、「一ト言もな」かったのである。

実際お縫の感情がどうであったのかは書かれていないので、断言できないが、少なくとも作品の最後まで「岩木のやうなる」お縫として描くことには成功しているのではなかろうか。もしお縫の「涙」が今まで「凍りついていた心の溶解のしるし」[32]であったのなら、そのことを示唆する他の仕掛けが用いられたはずだろう。しかし「岩木のやうなるお縫」の感情は無言の涙によって隠蔽されたまま、物語は桂次の帰郷とその後の話へと展開されていく。

秋蠶のはきたてとかいへるに懸りしより、二月に一度、三月に一度、今の間に半年目、一年目、年始の状と暑中見舞の交際になりて、文言うるさしとならば端書にても事は足るべし（略）若いさかりの熱といふ物にあはれみ給へば、此處なる冷やかのお縫も笑くぼを頬にうかべて世に立つ事はならぬか、相かはらず父様の御機嫌、母の氣をはかりて、我身をない物にして上杉家の安穏をはかりぬれど。ほころびが切れてはむづかし。（下）

桂次の手紙は、「世を終るまで」といった固い誓いとは裏腹に、半年[33]も経たないうちに疎遠になっていく。問題になるのは、末尾に置かれた「ほころびが切れてはむづかし」の解釈である。「冷やかのお縫」も笑顔で生きて行けるようになるのかという問いの後に、桂次が去った後にも変わりのないお縫の状況が語られ、「ほころびが切れては」困難であると書き添えられている。

前述したように、お縫がありのまま自由に過ごしていたのは、母親が生きていた頃までであって、桂次が現れたのは、「一生五十年めくらに成りて」生きる決心をした後である。ここで重要なのは、桂次がいた頃も帰った後もお縫が一貫した態度を見せていることである。「我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゝざるべければ、君よりも十通に一度の返事を與へ給へ」と男泣きする桂次の言葉にも「一ト言も」返事をしなかったお縫であった。手紙が続いたとしても、お縫がそれに返事をしたとは想像し難い。そもそも桂次の思いはお縫にとって、「上杉家の安穏」を維持することを諦めさせるほどのものにはならなかったはずである。つまり「ほころびが切れ」た時点は、桂次が現れる以前、即ち「一生五十年めくらに成りて」生きる決心をした「夫れより」(中)と見るのが妥当ではないだろうか。「一切この身を無いものにして」生きる決心をした時、お縫の人生において笑顔で生きて行ける可能性は「切れ」たと考えられる。

このように見てくると、問題視されてきた末尾の一文の解釈は大きく変わってくるのではないだろうか。即ち、桂次が現れる以前に、すでにお縫の心の「ほころび」は切れていたとしたら、(下)に描かれている二人の決別はそれぞれの日常への回帰でしかないのである。そのことを象徴するのが次の段落であろう。

思へば男は結髪の妻ある身、いやとても應とても浮世の義理をおもひ斷つほどのこと此人此身にして叶ふべしや、事なく高砂をうたひ納むれば、即ち新らしき一對の夫婦出來あがりて、やがては父とも言はるべき身なり、諸縁これより引かれて斷ちがたき絆次第にふゆれば、一人一箇の野澤桂次ならず、運よくは萬の身代十萬に延して山梨縣の多額納税と銘うたんも斗りがたけれど、契りし詞はあとの湊に殘して、舟は流れに隨がひ人は世に引かれて、遠ざかりゆく事千里、二千里、一萬里、此處三十里の隔てなれども心かよはずは八重がすみ外山の峰をかくすに似たり(下)

このように一時の「愁らさ」(上)も「一人一箇」の身ではない桂次にとっては「若いさかりの熱」に過ぎない。そのような桂次に対してお縫はすでに、「あなたは一家の御主人さまに成りて采配をおとりなさらずは叶ふまじ、今までのやうなお樂の御身分ではいらつしやらぬ筈」(中)と冷静な見方を示していたのである。

「三十里」という距離を隔て「世に引かれて」いけば「心かよはず」、熱かった思いも段々忘れられていく。言い方を変えれば、「大藤村」と「東京」はわずか「三十里」の「隔て」であるが、それぞれの置かれた境遇のため、最後まで「心の解しかねる」「思ふ心が通じ」(中)なかった二人にとって、その物理的な距離は、「千里、二千里、一萬里」と遠ざかる一方の精神的な距離を象徴していると考えられる。

結語

本作において「遊学」地である東京と「我が養家」の「大藤村」の間の「三十里」という「隔て」には、「心かよは」なかっ

た桂次とお縫の精神的距離が象徴されていると考えられる。

桂次は、「上杉家の安穏」（下）を守ろうとするお縫の意志（「冷やか」な態度として示される）により無事「大藤村の人」になることができた。それは「一人一箇の野澤桂次なら」ぬ養子の身分に相応しい結末であったと考えられる。一方お縫は、「親にすら捨てられたらんやうな」自分を唯一「心にかけて可愛がりて」くれた桂次の思いに最後まで応じないことで、「夫れより」の決意を守りぬいたのである。それ故「まづは上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし」と、良家の「安穏」は保たれ得たのである。

このように二人の「心の解しかねる」「思ふ心が通じず」「心かよはず」という状況は「世を終るまで」手紙を送り続けるという約束がはかなく途絶えてしまうという作品展開によって具現されており、「相かはらず」「身を無いものにして闇をたどる」お縫にとって新たな生き方の可能性は閉じられたと思われる。

注

（1）『樋口一葉全集第三巻（上）』（筑摩書房、昭51・12）

（2）滝藤満義「『ゆく雲』から『うつせみ』へ―一葉における小説の発想」（『国語と国文学』67-10、平2・10）

（3）「作品事典「ゆく雲」」『樋口一葉事典』（おうふう、平8・11）

（4）菅聡子「樋口一葉『ゆく雲』試論―心のゆくえ」（『淵叢』平4・3）

（5）峯村至津子「縫うこと、綻びること―「ゆく雲」お縫の造形をめぐって」（『一葉文学の研究』岩波書店、平18・3）

（6）高良留美子「樋口一葉『ゆく雲』と日記のなかの日清戦争」（『明治女性文学論』翰林書房、平19・11）

（7）山本欣司「樋口一葉『ゆく雲』論―「冷やか」なまなざし」（『日本文芸学』31、平6・12）

（8）新日本古典文学大系明治編『樋口一葉集』（岩波書店、平13）「ゆく雲」補注（菅聡子）によれば、「列挙された地名の多くは、甲州街道の宿駅」で、小島彦太郎『山梨県案内』（山梨日日新聞又新社、明39）の次の箇所が引用されている。「甲府市錦町より起り、石和、勝沼、駒飼、笹子、猿橋、上野原（略）、及び相模の津久井郡を経て、武蔵に入り東京府に達す、此間笹子、小仏の嶮坂あり。」

（9）出原隆俊「《樋口一葉》の小説作法」（『国文学　解釈と教材の研究』39-11、平6・10）

（10）ただし細かい設定においては対照的である。『宿魂鏡』の場合、許嫁の阿梅は田舎娘で控えめであってひたすら黙り込む姿が強調されているのに対し、華族女学校に通う男爵令嬢の弓子は「文明開化の新風」が漂う人物で、継母が決めた結婚相手のことを「妾は大の大の大嫌い」とはっきり自己表明をしたり、許嫁がいることに嫉妬し芳三の手を噛んだり、ストレートに自分の感情を表現したりする人物として設定されている。一方『ゆく雲』の場合は、東京のお縫のほうが控えめで口数少ない伝統的な女性として設定されており、田舎のお作の「甘やかされの我まゝ」（上）な設定と対比をなす。

（11）山田博光「湖処子と独歩―帰省小説をめぐって―」（『言語と文芸』11、昭44・3）

（12）松村友視「『帰省』論―創出されるユートピア―」（『藝文研究』77、慶應義塾大学、平11・12）

(13) 北野昭彦「湖処子の『帰省』と独歩の『帰去来』」(『園田学園女子大学論文集』13、昭53・10) なお、北野氏は(注13)柳田国男「湖処子の『帰省』」(『故郷七十年』朝日新聞社、昭49・3)を引用し、当時「帰省といふ思想は、あの時代のごくありふれた」感覚で、「そのころの読者」たちが『帰省』を読んで共感していたと述べている。

(14) 海老井英次「『三四郎』論—東京・〈集まり〉の人々—」(『開化・恋愛・東京—漱石・龍之介—』おうふう、平13)

(15) 前田愛『都市空間のなかの文学』(筑摩書房、昭57)

(16) 山本欣司、前掲論文(注7)

(17) 滝藤満義、前掲論文(注2)

(18) 前田愛編『全集樋口一葉　小説編一〈復刻版〉』(小学館、昭54)

(19) 前田愛、前掲(注15)

(20) 坂本武人「民友社と家庭雑誌」(『キリスト教社会問題研究』11、昭42・3)の引用による。

(21) 中島礼子「国木田独歩における民友社的なるものをめぐって—〈家庭〉〈夫婦〉の視座から—」(『国士舘大学文学部人文学会紀要』38、平17・12)

(22) 峯村至津子、前掲論文(注5)

(23) 『日本国語大辞典』第二版第三巻(小学館、平13・3)

(24) 『浮雲』では「是れが娘の時の心掛といふものだと云ひ聞かせても、(略)そんな事は女大学にだって書いて無いと強情を張る」、『虞美人草』では「糸はちっと女大学(ヨンナダイガク)でも読めば好いのに、近頃は恋愛小説ばかり読んでて、まことに困るって」がそれぞれ用例として紹介されている。

(25) 石川松太郎編『女大学集』第三節(平凡社、昭52)

(26) 中丸宣明「『ゆく雲』の位相—一葉における和歌的構想力の問題—」(『論集樋口一葉Ⅱ』おうふう、平10)

(27) 滝藤満義、前掲論文(注2)

(28) これに関しては大間恭子「『ゆく雲』論」(『石坂洋次郎研究』3、昭56・5)が詳しい。

(29) 山本欣司、前掲論文(注7)

(30) 菅聡子、前掲論文(注4)

(31) 関礼子「物語の綻び/出来事の生成—『ゆく雲』をめぐって」(『資料と研究』第三輯、平10・1)

(32) 関礼子、前掲論文(注31)

(33) 桂次の帰郷は「四月十五日」、『ゆく雲』校注(注8)によると「秋蠶」は「七月中旬から晩秋までに飼う」蚕であるので、半年も経っていないことが分かる。

※『ゆく雲』の引用は、未定稿もあわせ『樋口一葉全集第一巻』(筑摩書房、昭49・3)による。ルビは省いた。傍線、傍点、枠囲いは特に断りのない限り全て論者による。

(きむ・ゆに　本学大学院博士後期課程)